

## 板場 通夫氏 (前編)

01 02

みなさん、こんにちは。今回の「ときめくパーソン」は、飛鳥建設株式会社企画本部情報システム部の板場通夫部長です。

飛鳥建設では「半歩前に行く」をスローガンに、建設CALS/EC、電子商取引に対応すべく、1996年から5カ年計画で情報化に取り組んできました。

その結果、2001年にはグループウェアノーツと連携した基幹業務システム(ERP)の人事システムの全社導入も完了し、業界でも先進的な情報化体制が確立されたのです。

板場部長は94年に情報システム部長に就任以来、飛鳥建設の情報化を先頭に立って推進してこられました。

インタビューでは、前編で板場部長のITとの関わりについて、後編でERP導入の経緯と導入に伴うご苦労と注意点、そして建設CALS/EC及びIT化の流れに対しての個人的な見解などをおうかがいしました。

インタビュアーは鳥谷部真と島崎由貴子です。

**Profile**

板場 通夫 (いたば・みちお)

飛鳥建設株式会社企画本部情報システム部部長

**■ コンピュータとの関わりはシールド作業所での制御から**

島崎 このインタビューに先立って、実は特別に飛鳥建設さん内のノーツに板場部長が掲載されている個人のホームページを見せていただいたんです。それによると、板場部長は海外も含めて、ずっと現場の最前線に立ってこられた。私は仕事から、つい数日前も外資系ハイテク企業の情報システム部長にお会いしたのですが、その方の場合はネットワークの専門家、生粋のエンジニアなんですね。IT系の情報システム部長にはそういう経歴の方が多いのです。それで、板場部長の場合はどのようにITにかかわりをもたれていったのか、あるいは勉強されてきたのか、そこに興味をもっているのですが、まずその点からお聞かせ願えますか。

板場 あのホームページは、社員から自分で好きにホームページをつくって見たいという

のでつくったものです。アピールするというのも情報化の1つと思っているものだから、サンプルとして自分の経歴を書いたんです。

ITとの関わりということですが、私は、そういう意味では全然コンピューターの専門家ではありません。大学は電気科ではあるけれども、会社に入ってからほとんど関係ないですからね。コンピュータに関わるようになったのは現場でコンピュータを使って制御するとか、そういう実務面のニーズがあったからです。

島崎 現場で使われたのが最初だったのですね。

板場 そうです。私が入社した1968年（昭和43年）というのは、ちょうど高度成長が真っ盛り、山陽新幹線の建設工事が華やかなりし頃でした。私自身も山陽新幹線の現場の機械設備とか、いろんな段取りをしているんですけど、今から考えるといい時代でしたね。

島崎 経歴では、ずいぶん「シールド作業所」という言葉が出てくるのですが。

板場 シールドに携わったのは71年からです。入社後の5年間は本社にいました。ここではコンプレッサーやバッテリーロコを担当した他、広島のア芸トンネルの斜抗ベルコンの設計もやったんです。余談ですが、ア芸というのは、お酒がいいんですね。ここでは、「飛鳥」というブランドのお酒を酒造さんにつくってもらって、いまだに納品してもらっているんですよ。

そして、73年から79年までが東京支店で、都内近郊のさまざまなシールド作業所を回りました。ここから、コンピュータとの付き合いが始まるわけです。現場があったのは、京浜東北線の東十条というところがありますが、そのJRの線路と環七が交差する地点です。ここは当時、日本一の大断面シールド工事で、環七の下を泥水シールド工法で掘ったんですよ。直径が7メートルぐらいありました。東京湾横断道路を掘った工法と同じなんですけど、横断道路は14メートル、十条シールドは7メートルですから半分ぐらいなんですけど、それだけの断面を泥水工法で掘るといのは当時では最初だったんです。もっとも、泥水シールドと言われてもわかりませんか？

島崎 要するに泥水が流れてこないように堰き止めながら掘り進める技術のことかと.....

板場 まあ、そんなところですよ。茶筒みたいなものでトンネルを掘っていくんですけど、出てきた泥水を循環させるんですね。泥水を送って、その掘った場所から出てくる土砂が泥水に混ざってまた帰ってくるんです。行きと帰りで、掘った分の土が増えますから。その間の密度の差だとか、流速を計測する。パイプで送りますから、パイプに比重計と流量計がついている。その全部を計算すると掘った量がわかる。そのためにコンピューターがいるんです。それが泥水工法の中央制御室にあります。そのとき初めてテレメーターという制御系のコンピューターシステムを使ったんです。

島崎 どこのコンピュータだったのですか。

板場 それは日本の会社が我々の現場用に組み立てたんです。全部、ボードコンピュータ、現場の、ほんとうに工事をするための制御装置ですね。なぜそんな話をするかというと、そのときに初めて、ネットワークでデータをやり取りする雰囲気、イメージがつかめたわけですよ。結構便利なものですよ。地上にいて、トンネルの中の状況が全部計器でわかるわけですから。

鳥谷部 シールド機と地上をケーブルで結んだのですか。

板場　そうです。1本1本、圧力計1個にケーブル1本ですから。光ケーブルも何もないような時代だから、全部の端子に線が1本ずつくっついていきますから、何百芯というケーブルを、トンネルを掘っていくのに合わせて延ばしていかないといけない。記憶は定かじゃないですけど、2、30本ぐらい入っているケーブルが数10本いるわけですから。それを毎日5、6メートルずつ延ばして、それで100メートルほど行ったら、またつながないといけないから、大変な作業です。

島崎　本当に大がかりな作業ですね。でも、コンピュータのすごさをその体験で実感された・…。

---

[| 次ページに続く |](#)

---

[| Contents |](#) [ときめくパーソン menu](#) | [page top](#) |

---

**C-PAS TopPage**

[個人情報保護ポリシー](#)

[.Copyright\(c\).2001 NIFTY Corporation](#)

## 板場 通夫氏 (前編)

01 02

## ■ 台湾、シンガポールでの技術指導にもコンピュータを活用

板場 そうですね。その経験があって、79年から83年に台湾に行ったものですから、ここでもコンピュータを活用しようということになった。

台湾では、台北市の下水道工事の技術指導をしたんです。2本、トンネルを掘ったんですけどね。ここでは、泥水シールドじゃなくて、土圧式シールドといわれるものを使いました。泥水を送るのではなくて、掘った土でバランスさせながら進んで行くんですよ。

泥土に圧力をかけて、バランスをとるので泥土圧というんですが、先端部分に圧力をかけながら、崩壊しないように掘っていくんです。その崩壊しないように微妙にコントロールするために、コンピュータを使うと便利なんですね。

人間だと、判断を間違えるとたくさん掘ってしまいますので。その工事に携わっていた人達は、昔、蒋介石の兵隊さんだった退役軍人を集めた組織です。ですから、トンネルを掘る人も全部公務員で、そういう人は北京語をしゃべるわけです。技術指導だから、飛島からは3人しか行きませんので、コミュニケーションには苦労しました。

島崎 通訳を雇われていなかったのですか。

板場 台湾は50過ぎればみんな日本語教育受けていますから、「大丈夫だよ、あんなところは外国じゃない。日本語通用するよ」とか言って、外国語学校へ行かせてもらえなかった。仕方なく自分で勉強したのですが、覚えるまでが大変だった。

幸い、コンピュータを使っていたので、圧力の計測データが感熱紙で出るものですから、それを見せれば「この範囲で掘りなさい」とか「はずれてる」とかいう指示が出せますからね。教えるのに非常に便利でした。

ボードコンピュータは、ICじゃなくてトランジスターです。その当時のトランジスターは、熱に弱くよく壊れましたね。

島崎 一般には、ワープロも使われていない時代ですよ。

鳥谷部 IBMが16ビットのパソコンを出したのが、昭和56年でした。

■ ボーナスをはたき、70万でパソコンを購入  
パソコン通信で世界が変わる

板場 その次に地下鉄工事の施工でシンガポールに行ったんですけど、そこらあたりから、コンピュータが大分進歩してきました。シンガポールで最初の地下鉄工事だったものですから、日本から特殊な機械を全部持って行ったんですよ。



しかし、そういう持ち込み機械の資材管理をしないといけなかったものですから、情報システム部の人が出てきて、輸入した機械をDB（データベース）に残るようにしてくれたのです。

当時はまだマルチプランとdBASE しかない時代でした。確か、PCはIBMだったと思います。それがパソコンを使って現場を管理する本格的な試みの最初でしたね。それで、シンガポールに3年いて、帰ってきたときにボーナスをはたいてパソコンを買ったんですよ。パソコンとプリンターで70万ぐらいしました。

島崎 個人でそれだけの投資をなさったというのは、すごいですね。購入されたPCで、何かに利用しようという具体的な目的がおありになったのですか。

板場 きっかけは、海外へ行ってコンピュータって便利なもんだなっという単純なものだったのですが、それだけの投資をすると、仕事でもプライベートでも活用しなければと思いますよね。

それで、40万円近くしたのですが、データベースソフトのdBASE が出ていたので、会社で買ってもらって、会社用には特許管理のプログラムをつくりました。プライベートでは、自分用の年賀状整理だとか、我が家の家計簿など、いろいろなことをやっていました。

そして、この頃、パソコン通信を始めたんです。どうやったらパソ通ができるのか、よくわからなくて、それで、図書館の雑誌に、アスキーからCTERMというパソコン通信のソフトが出ていたので、それと1200bpsのモデムを買いました。ホスト局の電話番号がわからず、1カ月ぐらいつながらなかった。それで、いろいろやってみたら、やっとつながったんです。

島崎 どんな感じでしたか。

板場 びっくりしましたね。つながった時には世界が変わった感じです。ほんとに歓声を上げました。ネットワークを通じて人とコミュニケーションが図れるというのは、ほんとうに画期的だと思いました。

---

## ■ ニフティサーブに社員専用の〈飛島ネットワーク〉を開設

島谷部 お作りになったのは、草の根BBSですね？

板場 そうですね。BBSで入手したものだったんですけどね。それで、パソコン通信ができることがわかったんで、次に現場の人たちと情報を交換できるように、会社にホスト局をつくったんです。その当時はシールド工法関連の技術開発をやっていましたので、全国のシールド担当者の人たちとネットワークで情報交換ができればいいなと思って。

島崎 それが、発展して当時のニフティサーブにつくった社員専用の〈飛島ネットワーク〉になったわけですね。



板場 ええ、なんとかネットワーク化を進めようという啓蒙の意味で、社内報に記事まで出しました。それが92年。結局ネットワークの威力というのはある程度、自分で利用しないとわからないものなんです。

現場にいると支店のある都市部から遠く離れ、必然的に社内の情報が入ってくるのも遅れがちになって、疎外感を感じるんですよ。しかし、パソコン通信ができれば、本社や支店が発信した情報を直接目にするができるし、本社や支店に向けて自分からも発信できる。また、施工上で壁にぶつ

かった場合でも、社内に呼びかければ、遠隔地からでもアドバイスをもらえる可能性がある。ですから、ネットワークというのは、社内のコミュニケーションのあり方を大きく変える可能性をもっていると思ったのです。

島崎 インターネットが普及するかなり前、92年頃からネットワークの可能性に着目されていたんですね。

鳥谷部 その時代に、PCはどれくらい普及していたんですか。

板場 資料によれば……。93年の6月で、本社に123台、支店156台くらい。ある意味ではしょうがないんですよ。会社の業務はホスト端末で処理しますから、パソコンはそれほど必要なかったんです。まだ、パソコンは技術計算用だった。

鳥谷部 データベースとネットワークをご自分でやられたところがすごいですね。

板場 当時のdBASE は、アプリケーションをつかって、それだけでビジネスになりましたね。

後編に続く……

---

[Contents](#) | [ときめくパーソン menu](#) | [page top](#) |

---

**C-PAS TopPage**

[個人情報保護ポリシー](#)  
.Copyright(c).2001 NIFTY Corporation